

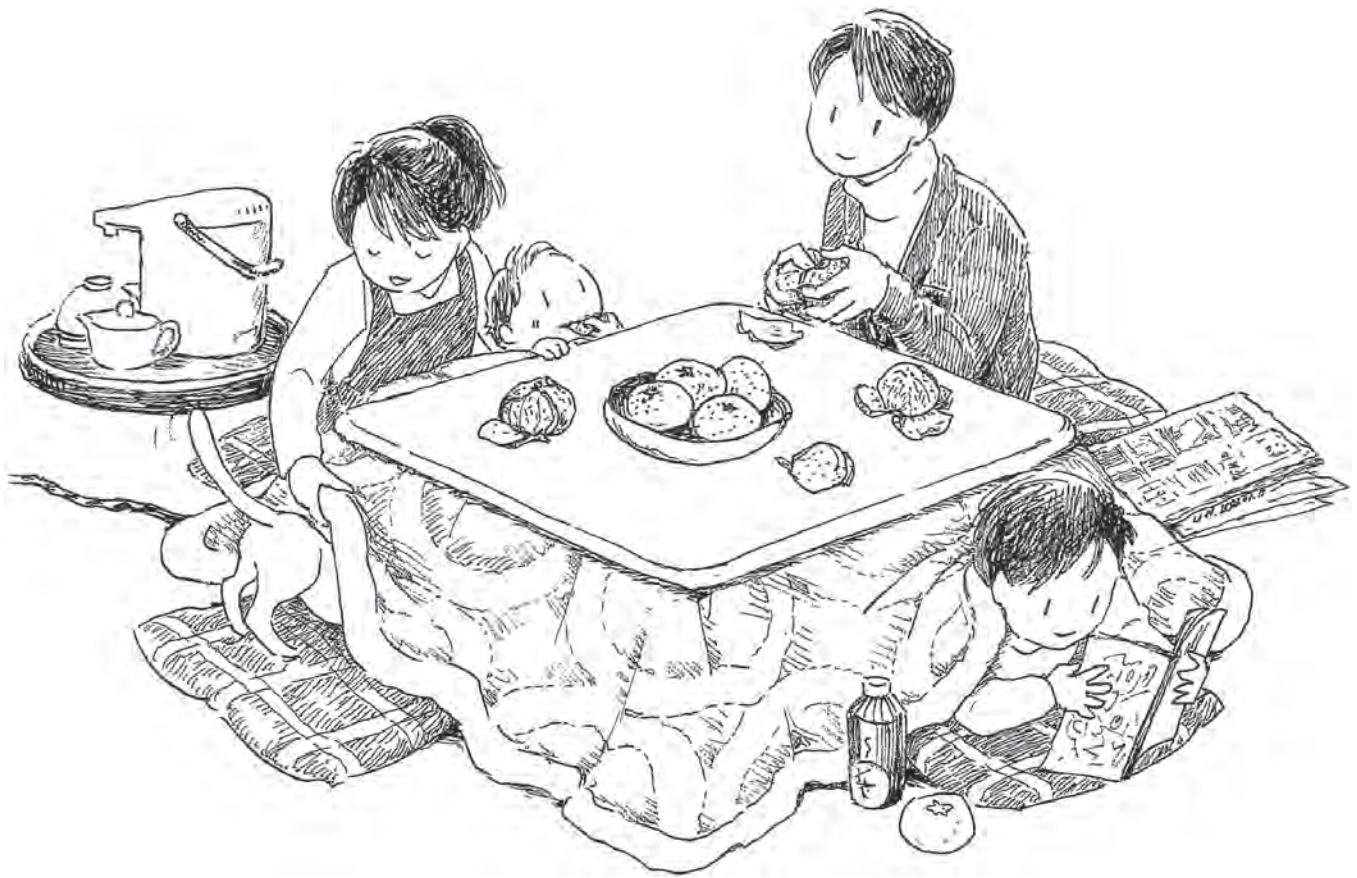
光の子



No.199 2021.2.22

●年間聖句 知る力と見抜く力とを身に着けて、あなた方の愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように。

(フィリピの信徒への手紙1章9、10節より)



「ぬくもり」

表紙絵・中島由起子

追悼 黛 執様

おぼろ夜の湯郷の谷を一つ越す

田を褒めて浮野称へてげんげ道

草笛を吹いては執を悼みけり

海を見に出てはるかなる春を呼ぶ

ありし日の青春日記春しのぶ

平之助好みし叙情花簞

春燈につづく春野に出てひとり

落合水尾（「浮野」主宰）

新年度に向けて

施設長 竹花 信恵

卒業、入学、そして光の子どもの家から卒園するもの。それぞれに新たな生活の準備を始めています。冷たく寒い時にこそ次の季節への準備がなされていることを、小さな木の芽に教えられ、励まされます。いつもと同じようにはいかなかった一年を経て、今年はどうな一年にしていけるでしょうか。

相変わらず入所依頼が続き、お断りしなければならぬ毎日です。一方「帰宅訓練」を重ねておうちに戻り、新しい生活を開始する予定の子どももいます。初めて会った頃は、言葉がほとんどしゃべれなかったのに、家に帰る喜びも不安も言葉で表現し、その成長に驚かされています。寂しくて、悔しくて、怒っている子どもも、取り繕うことで疲れてしまうだろう子どもの姿も見えます。やらなけ

ればならないことよりやりたいうことを思いっきり優先させてエネルギーを発散させている子どももいます。

幼い子ばかりでなく、大きくなつてからの入所が増えました。これまでどれほど大変な生活を送ってきたことでしょうか。彼、彼女にとつても、これまでの生活よりこれからの人生のほうがずっと長いことを改めて思われます。その進む方向をみつけることにしっかりと立ち会っていくことが私たちがすべきことかもしれません。

さて、ここ数年、運営上の課題として、4つのことに取り組んできました。

① **世代交代に向けた職員育成**
創立からのメンバーが、子どもたちとともに年を重ね、今でも数名が残っています。しかし、いつまでもそうはいきません。

まず働く人を採用できるかどうかからの出発となります。かつて、働きたい人が全国にあちこちから集まった時代がありました。今では、その働き方ではこれからは来ないよ、と心配の声さえ寄せられるようになりました。もともと「働く場」としての視点が欠如していた「家」なので、さまざま整備、改善は急務です。

これからも子どもと安心できる関係を育み、養育の連続性と一貫性を大切にできるように努力していきます。

② 子どもをおろそかにしない働き方改革

何があるうと子どもの利益が最優先であるという初心を忘れません。「休み」と「子ども」を天秤にかけるような議論ではなく、引き続き、子どもが安心して暮らせる「子どもたちのための子どもの施設」をめざします。ひとりできなかつたことを、ふたりで、チームでやってみよう、という大切さを実感させられていきます。養育とは何か、自らを省み、学び続け、よりよい関わりをめざします。

③ **大規模改修を進め、より小規模・分散の暮らしへ**
暮らしの形をどう考えていくかという、重要で大きなプロジェクトとなります。これからの児童養護施設のあり方も直結していく事柄です。自分たちだけでとても考えられることなく、皆様からの篤い応援を糧に、具体的な実現に向けて相談を重ねてまいります。

④ いのちを守る危機管理

いつ起こるかわからない地震、火災、利根川の氾濫といった災害。今回の新型コロナウイルスのような感染症。インターネットを介したトラブルなど、日々さまざまなリスクへの対応を迫られています。

昨日のように今日が続きたいのまにか日々を重ねていくたようなこれまでとは違う転換点を迎えています。それぞれにほつとできる春が訪れますように。光の子どもの家らしく歩んでいけるようどうぞお祈りください。これからもどうぞよろしくお願い致します。

仙道家から

橋本 寛司

政宗が誕生日を迎えた。

去年は最新の仮面ライダーのベルトと一緒に買いに行つてプレゼントした。一昨年は好きな仮面ライダーアイテムの詰め合わせを渡していた。今年も最新の仮面ライダーのベルトをプレゼントすれば喜ぶかな?と考えていた。

ある時、政宗と一対一で遊ぶ時間があった。政宗はブロックで仮面ライダーセイバーの顔を作っていた。「ねえ政宗、誕生日プレゼントは新しい仮面ライダーのベルトがいい?」と尋ねてみた。すると政宗は「仮面ライダーのベルトはちよつと……」と、微妙な反応。「何かベルト以外に欲しい物があるの?」と聞くと、政宗は「モッチ、俺、マインクラフトが欲しいんだ」と言った。

確かに、前からマインクラフトの話はよく聞かされていた。仙道家はニンテンドースイッチを持っている子が多く、羨ましがつてもいた。その場でスイッチの在庫等を調

べてみたが、このご時世、ゲーム等はどこも売り切れで頭を抱えた。

「ごめん政宗、マインクラフトは厳しいかも……」「別にマインクラフトじゃなくてもいいよ。ただ……」「ただ?」「旅に出るための道具が欲しい!」

旅!?政宗!? 自分はポカんとなくなってしまった。すると政宗は言った。「セイバーは『物語の結末は俺が決める!』って言うてるけど、俺が進む道は俺が決めたいから、だから旅がしたい。それが俺の夢なんだ」

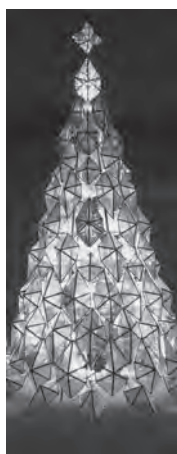
なるほど、コロナの影響で毎日学校と家との往復のみで、それ以外の場所には殆ど出かけられない。政宗の言うことももつともだ。

「因みに旅つて、どこまで行くんだい?」「え?うん、北海道まで歩いて行く!」それまたでっかい旅だ。その日はそのやり取りで終わった。

誕生日会当日。自分は誕生日プレゼントとして心ばかりのマインクラフトグッズと、ハン

カチ、消毒液を渡した。そして「政宗、『夢に向かつて飛べ!』政宗が歩むその先にある壁も山も惑星も政宗なら踏み越えていけることを橋本さんは信じているから頑張つてください」と激励の言葉を送った。

いつになるかはわからないが、政宗が成人し旅をした日には、お酒を酌み交わしながら旅の話聞くのを楽しみに待ちたいと思う。



倉澤家から

倉澤 智子

コロナ一色の今年度、子どもたちは我慢を強いられることが多く、大変な1年であったと思います。特に今年度中学3年生、高校3年生だった子どもたちは、本来ならば友人たちとの様々な思い出が次々と止んだらう行事が次々と中止になり、本当に気の毒でした。

光の子どもの家でも、大きな行事はほぼ中止になりました。

入所間もない子どもたちには、本来のクリスマスやお正月を体験させてあげることができず「本当なら12月24日にキャンドルサービスがあつてね……」

「例年なら祝会にお客様を招待してね……」と、ひとつひとつ説明をした上で迎えたクリスマスとお正月でした。

そんな、窮屈な生活の中で、子どもたちはそれぞれ『おうち時間』を楽しんでいました。ひたすら絵を描く子、パソコンで動画を楽しむ子、お気に入りのアイドルグループのDVDを観る子、裁縫の得意な子は自分の部屋のカーテンの丈詰めをしていたようです。

まだまだ自分の身を守るために、周囲の人たちに迷惑をかけないために、この様々な制限の中の生活は続きそうです。自分たちのできることを行い、小さなしあわせを子どもたちとみつけながら暮らしていきたいと思つていきます。

無胃人の弁 (1) その導入口

老健施設紅寿の里 施設長 仙道 富士郎

「無胃人」という言葉は無い。私の造語である。定義は「胃がんの手術で胃全摘術を受け、胃を失ってしまった人間」である。干支のウシは4室の胃を持つているから、無胃人はウシをうらやんでいるかも。

事は昨年10月末に起こった。勤務している老健施設の集団検診で「2回の便潜血反応の1回分が(+)なので、大腸ファイバーを受診するよ」に」との検査結果が出た。「いい加減だなあ」と即座に思った。話を進めるためには白状しなければなるまい。集団検診を受けた方ならご存じの筈だが、便潜血反応は、2日にわたって採取した2回分の便を対象として検査が行われる。私は「ズル」をしたのである。尾籠な話で恐縮であるが、私は便の同じ所から2個取って2回分として提出したのである。だから、2つの

サンプルのうち一方だけが(+)になるはずはないのだ。「しかし、大腸ファイバーを受けないと、検査センターから催促が来るから、うるさいから、受けるか」、どこまでも傲慢である。

医学部にいたとき、医学博士の論文を指導した医師が開業しているので、そこで大腸ファイバー検査を受けた。小さな直腸ポリープが見つかり、半年以内にポリープ切除を受けるようにとの事、傲慢な男はまた「面倒だなあ」と思った。何しろ大腸ファイバー実施前には、大量の下剤の入った液体の服用が必要であり、老人には一苦勞であった。ポリープ切除の時も同じ事が必要だという。そして、ここから話の本筋なのだが、大腸ファイバーのついでに胃カメラ検査も受けることにした。というのも、さらに傲慢の二乗のよう

な話なのだが、集団検査の胃バリウム検査が嫌で、検査拒否をしていた。それなら、胃カメラ検査を受けなければならぬのだが、忙しさにかまけて(?)、数年受けていなかったし、最近胃部の不快感もあった。

胃カメラは大腸ファイバーに比較して楽であったが、途中から、様子が変であることが分かった。臓器の局所から組織を採取して、病理学的に検査することをバイオプシーというが、細いワイヤーを胃カメラを通して挿入し、ワイヤーの先端についている鉗子で組織をつまんで取り出す。何回もワイヤーを入れる音がして、次に「オープン」「はい、噛んで」と執刀医が助手に声をかけている。これまでも、胃カメラの際に、念のためだろう、1、2個のバイオプシーを採取することはあったが、こんなに何回もワイヤーの出入りする音を聞いたのは、初めてである。瞬時、「やばそー」と思った。案の定、胃カメラを終わると、主治医はスクリーンに内視鏡で撮影した胃の内部を見せなが

ら、「悪性のものですよね」と言い、バイオプシーの結果が出たら、最終的な今後の治療方針を出すとのことだった。話を聞きながら、色々のことが脳裏をかすめた。「かなり、病変の範囲は広いな。ただ、隆起病変が主だから、もしかしたら良性のものかもしれない。手術はどこでできるかなあ?」。意外と死に対する恐怖といったことは、意識の対象には上らなかった。要は、今起きている状況をどのように理解し、それにどう対応したらいいのか、思いを巡らす対象であった。現実主義と言ったらいのか、現場主義と言ったらいのか、何かが起こると、それにすぐ反応しようとする。これまでもそうしてきたから、そのやり方の延長線上の話なのである。人間の生き方、そんなに変わるものとも思えない。

それからの私の取った行動は、実に敏速であったし、実に傲慢であった。傲慢の三乗といったところか。主治医はバイオプシーの結果待ちと言っていたが、そんなに待って



羊子（7）、振り袖で記念撮影も、照れて早々と自室へ引き上げる。菜々（7）、両方着たいと言い、上は振り袖、下は袴で合わせる。彩（4）、黄色の振り袖。

七五三それぞれ

はいられない。親しくしている消化器疾患を専門としている教え子たちに状況を話して、手術を受けるべき病院と執刀医についての、示唆を求めた。主治医に全く相談もしないままにである。何人かの話を聞いて、私のところで学位の研究をした、山形大学で外科の准教授をしている医師に手術してもらうことに、患者本人が決めてしまった。主治医には事後通告である。無胃人への導入口である。

同窓会にて

彫刻家 中島 睦雄

光の子182号にて「そのうち」というタイトルで書かせてもらった。中学の同級生のK君が「そのうち」という宛でもない言葉をほぼ必ず実現してくれ、1年に1回、計50回もの同窓会を催してくれた話である。

今回は、その30回目の同窓会の時のことを少し掘り下げてみようと思う。

K君は、旧国鉄の職員だったこともあり、色々な観光名所などをよく知っていて、その知り得た観光名所などを同窓会旅行にと企画し、参加者への連絡、取りまとめ、ホテルの予約やら、観光案内やら、いわゆる幹事というやつを全て1人でやってくれるのである。参加者があまり負担にならないようにとの配慮もしてくれるのである。

30回目の時は、岩手県のある温泉に行った。30回目となると参加者も次第に少なくな

ってきたが、それでもK君の企画した同窓会旅行には30人もの参加者が集まった。

ここまでしてくれるK君に何かしてあげられることはなにかと、仲間たちと相談した。そして感謝状を贈ることにした。記念にと花の油絵も添えるのである。そしてできた感謝状の文面がこうである。

感謝状 K殿

あなたは長い年月にわたり、独断と偏見による旅行の計画をされ、不思議な手紙を出しまくり、様々な面倒な手続きを経て旅行を実行し、友人の融和を図ってくれました。

我々の残された人生をより一層楽しくしてもらう為に、この辺で、記念品を添えて感謝の意を表します。

平成7年9月15日 同級生 有志一同

感謝状の序文では彼の行いを貶して、後で感謝を、としたのである。

「こういうのは、もらえる人も、あげる人もいないんだから、大事にしるよなあ」それなりに見える保管用の筒を添え、彼にはそう伝えられた。

感謝状を見たK君は、「ありがとう!!」と嬉しそうであった。我々が59歳の時である。

その後、感謝状の後文にもあったようにK君は我々の残りの人生を毎年楽しませてくれ50回目を迎え、それを機に集まりを終わりにした。

全く珍しいが、素晴らしく、そしてありがたい友人がいたものである。

現在は、彼も含め少数で集まり、そこら辺でお茶や食事で楽しんでる。

やはり彼の辞書には「そのうち」は無いのである。

共育ちカンガルー日記 (58)

初めての塾通い
近藤 みちる

W先生ご夫婦が小学校のすぐ近くにS塾を開設したのは三年ほど前のことで、この学区で初めてできた学習塾だった。優希の周りでもS塾に通い始める子が何人もいて、「優希も通いたい」と言い出すのにそう時間はかからなかった。

その頃優希は、いくつかの習い事に通っていた。スイミングやチェロなど、指導者に恵まれたこともあり、上達はゆっくりだがマイペースに楽しく通い続けることが出来ていた。

だが塾となると全くの未知数。そもそも優希は支援級の子で、自閉症の特性として対人面や社会性、コミュニケーションに大きな苦手さを抱えている。それを知った上で、優希を快く受け入れてくれる塾があるのだろうか。二の足を踏む私達の背中を押ししたのは、「塾に通いたい」という

切なる優希の熱意だった。門前払いを覚悟で、私達はS塾の門を叩いた。

塾長のW先生は四十代半ばの気さくな人柄の持ち主で、S塾を開く前は横浜で十年以上、進学塾の講師をしていたという。優希が自閉症という障害を抱え支援級に在籍していることを告げると「とりあえず優希ちゃんを連れて体験授業にいらしてください」とのこと。

S塾の学習室には、個別に仕切られた学習机が十数台あり、それぞれにパソコンが一台ずつ完備されていた。対面授業はなく、各自パソコンを使って個々に学習を進めていく完全個別学習方式なのだという。これは優希にとっては好都合で、パソコンを使つての体験授業を難なく済ませると、すっかりS塾を気に入った様子の子の優希であった。

「支援級に通うお子さんを

指導した経験はありませんが」W先生は言った。「優希ちゃんやご両親が求めているものを私が提供できるのであれば、どうぞうちの塾に通ってください」と。こうして優希は晴れてS塾の生徒となったのである。

それが六年生の春のこと、優希は週に一度学校帰りにS塾に寄り、九十分間の算数の授業を受けるようになった。何もかもが新鮮で楽しくて仕方がなかったのは最初の数か月ほどで、慣れてくるにつれて優希は少しずつ、その本領(特性)を発揮するようになった。

聞けば「学校と教え方が違うから、W先生の話は聞けない」というのが優希の言い分、もちろんこれは優希の特性から来る拘りであって、決して我儘を言っているわけではない。だがあくまで塾は塾で、学校とは違う。「W先生の言うことが聞けない人は、S塾には通えません。首になります」半分脅かしで再三その言い聞かせてはみたものの、まるで効果はなかった。だが、そこはさすがという

べきか、W先生はこんな一筋縄ではいかない優希に怯むどころか、手を変え品を変え、根気強く向き合い続けてくれた。算数が煮詰まったと踏めば国語へシフトし、拗れた空気をリセットするために担当を奥様であるY先生へとシフトし。頑なだった優希が、いつしかY先生との国語の授業を心待ちにするようになっていった。

そんな中での面談の席で、W先生は気持ちの良いほどにあっけらかんと笑つて言った。「今はもっぱら嫁(Y先生)が優希ちゃん担当です。悔しいことに、あの優希ちゃんが、嫁には心を許しているみたいなんですよ」と。

そこにY先生が加わった。「その嫁ですが(笑)優希ちゃんも最近、国語の読書プログラムでお気に入りのシリーズが出来たんです。もつと先を知りたい、もつと読みたいって、それはそれは楽しそう。でもこの前『優希が塾ですっかり出来ない』とみんなの迷惑になるんだって。そして優希は塾を首になっちゃう

んだって』って言ったんです。きつとお家の方が私達に氣を使つて優希ちゃんにそう教えているのかなと思いましたが。何だか切なかつた。優希ちゃん本当に楽しそうなので。『塾』というより『楽しい居場所の一つ』としてここに通っていたくのもありかなくて、私は思っているんです。どうか塾を首にしないであげてください。』

その言葉には、優希に寄り添い、共に歩み続けているからこそその温もりが溢れていた。首など誰ができた。Y先生が言うように、ここにはきつと優希の確かな居場所があるのだろう。驚くべきは、優希が私達の知らないところで知らないうちに、こんなふうに誰かと大切な居場所を創り上げていたということ。私達の優希がまた少し遠くに行つてしまった気がした。

どうやら初めての塾通いは思いがけない形で、優希をひと回りもふた回りも大きく、そして頼もしく成長させてくれたようである。

マフラーを編んで思春期最中なる みちる

原田家から

岩瀬 志穂

今年度は、例年通りとはいかない1年でした。これからコロナと上手く付き合つていくしかないのかなと思つています。

ソーシャルディスタンス、外出自粛といわれ、なかなか会いたい人にも会うことができなくなり、人との繋がりが余計に難しくなつたなど残念です。それでも、子どもたちが以前いた乳児院の職員がクリスマスや誕生日にプレゼントを贈つてくださったり、光の子どもの家にお心をつかい、ご寄付や物品、食品等の支援をしてくださったり、こんな状況でも、繋がりが、想い、祈りを大切にしてください。ことに本当に感謝いたします。

私も繋がりを大切にして、こんな状況だからできない、ではなく、こんな状況だからこそできることがあるという想いで、コロナに負けず、子

どもたちと一緒に乗り越えていきたいと思ひます。

佐藤家から

池田 祐子

この冬もサンタクロースは子どもたちのところへ来てくれました。

年長の彬はぬいぐるみを貰いました。ボタンを押すと、寝息をたてたり、音楽が流れたり、と安眠を助けてくれるようです。

「これからは、寝るとき、彬と祐子さんの間に置くからね」と、就寝時にはボタンを押して音楽を流してくれます。おかげで彬と私はぐっすり眠れます。

また、彬はキックボードも貰いました。早速道路で元気に乗っていました。ところがある日、大々好きな工具でキックボードを何やらいじっています。

「分解しているの？」と聞くと

「直してんの」と彬。

傍にいた職員に聞くと、「分解したが直した」とのこと

とでしたが、キックボードは乗って楽しんでほしいものです(笑)

〈お正月〉

大掃除を終えた大晦日の午後、リビングにコタツを三台出しました。お正月の為に。

光の子どもの家でのお正月を初めて迎える中2の莉玖は「コタツだあ！うち初めてなんだよ！」と、嬉しそうです。

コタツに入り、トランプで遊んだり、お菓子をつまみながらテレビを見たりと、まつたり過ぎました。

「足ぶつかるんだけど」ということもありながらもコタツ生活を満喫した莉玖のお正月でした。

食堂から

佐俣 浩代

4月から1年生になる彬君と吉尚君。

去年の暮れに2人は幼稚園からカルタをもらいました。

年が明け、彬君がそのカルタを持って担当保育士の池田とともに食堂に来たので2人

でカルタで遊ぶのかなと思いきや、「おばちゃん、ボクこれ使わないから食堂にあげると笑顔で手渡してくれました。」

使った様子が無い新しいカルタ、これからひらがな勉強するだろうに、と思ったので「みんなでこのカルタを使ってもいいの？」と確かめました。すると天使の満面の笑みで「いいよ」と言います。その笑顔に思わず「ありがとう」と受け取りました。

一方の吉尚君は負けず嫌いで何でもやりたがり屋さん。どこにでも顔を突込むので、けむたがられる時もあります。

ある時、仲間はずれにされ、しょんぼりしていたので、季節はずれでしたが、吉尚君に彬君からもらったカルタで勝負を挑みました。吉尚君の顔が輝きました。

2年前、吉尚君はまだ字が読めないのにお兄ちゃん達がカルタで戦っているのに加わりたくて無理やり入ってきたもののつまはじきにされました。いっしょに遊びたくて、字は読めないのですが、もの

すごい集中力でカルタの読み札の言葉と絵を覚え、絵本ワニワニシリーズのカルタを全部覚えてしまいました。それから自然に字を覚え、今では小学1年生の子と対等に勝負が出来る様になりました。

私との勝負は負けず嫌いの吉尚君の勝ち。御機嫌で食堂を飛び出し外へと遊びに行きました。

カルタをくれた彬君はひらがなに全く興味がありません。

砂場に枯れ葉で巨大ケーキを造るといい、年少組の英樹君を使って「もつとはつぱをもつて来て！ まだ足りない」と親方なみの指揮振りで枯れ葉を砂場に運ばせています。自分は背丈と同じ位のシヤベルを使い枯れ葉の上に砂をかけ、ミックス。私は思わず、「これは後始末が大変だね」と言ってしまうました。それを聞いていた彬君が「大丈夫だよ。後で彬がフルイにかけるから」と天使の笑顔でやさしく言ってくれました。さすが!! 未来の親方。よく道具の名前を知ってるね。失礼しました。

負けず嫌いの吉尚君と大工仕事が好きなきな彬君。どんな1年生になるのか楽しみです。

牧野家から

田口 貴子

朝晩の冷え込みが一段とひどくなり、霜が降りる朝も多くなってきました。そんな中でも子ども達は元気に登校、登園しています。皆様はいかがお過ごしでしょうか。

つい先日、正月を迎えたばかりだと思っていました。子ども達の中ではもう2月の節分の話が出ています。

牧野家に入った日の事。威張っていた4歳の彩に対し紅が「そんな風に威張ってるから、鬼さんに電話しちゃおう！もうすぐ本当に鬼さん来るからね！」と声を掛けました。その言葉を聞いて、彩は意気消沈……。私はと言えば「もうすぐ節分か！」と鬼を怖がる幼児とは対照的にうきうきしてしまいました。

光の子どもの家には秋田県の名マハゲとまではいきませんが、鬼が来訪します。鬼の

来訪には、子どもが鬼をやっつけることで自信が付くようにとの光の子どもの家独特の意味合いがあり、「悪い子はいねーかー！」と迫力をもつてやっつては来ますが、豆を投げればやられてくれる鬼ばかりです。それどころか、豆がなくなつた子に、落ちている豆を集め、差し出す鬼も居ました(笑)

しばらくやり取りをしたのち、ごめんねと謝る事ができた彩。鬼がよほど怖いようでした。私にも泣きついてきました。私からは鬼はお豆を投げるとやっつけられるよ。貴子さんも鬼が怖いから一緒にお豆投げようね。彩も貴子さん守つてね。とにやにやしながら話をしました。すると、持ち前の切り替えの早さで「うん！一緒になげようねー！誰がお豆買ってくるの？」と彩。コロナ禍の中自分自体出来ないかもしれませんが、もし鬼が来たときは頑張つてやっつけてほしいです。

そんな会話の末、牧野家の子どもたちと節分の思い出話をしました。本園での節分の様子も含め、いろいろな武勇



伝が思い出され、とても懐かしくなりました。鬼の姿にパニックになり、泣いてしがみついていた子、静かにテーブルの下にもぐっていた子達が、一年経つと凛々しい顔で豆を必死に投げたり、「もう帰って!!」と言い返したりできるようになる子もいます。鬼の自身は職員だと言ってはやし立てていた子どもも、幼児を励ますようになっていきます。数年経つうちに、そんな話を子ども達とできるようになり、何となく過ごしている日が積み重なる事で、共通の思い出が増えていく。自分の事は周りの人が覚えていてくれる、自身は自分の事も周りの事も覚えていてる事ができる、それが尊いものだといつか気が付く時が子ども達にも

来るのだろうなとふと思えます。

編集委員から

黒川 健一郎

年に5回発行している「光の子」が皆様のお手元に届くまでのこと。

印刷会社から納品された「光の子」を食堂に運び、発送作業をします。ビニールパックに詰めて封をするという単純な作業なのですが、5千部となるとそれなりの時間を要します。

学校が休みの日に作業をしていると、小学校高学年の子どもたちが「何やってるの〜?」「うちもやる〜」と言って手伝ってくれます。その姿を見た小さい子どもたち

も「おれもやる〜」「やりた〜い」となり、3、4テーブルを使うくらいの人数になります。

数人の大人だとなかなか先が見えてきませんが、子どもたちのエネルギーが、数時間後には先が見えるようになります。

高学年の子らは「あー、これってあの時の〜!」「これってあれだよ〜」「こんな風に書いてるんだ〜」と光の子を読みながらやっていきます。小さい子は、しりとりや連想ゲーム、好きなお菓子ラッキンク等でワイワイ楽しくしていると思いきや。

「あー!!それ!うちが詰めようとしていたのに!」「そんなに沢山取らないでよー!!」「お前ばかり沢山やってずるい!」「おれが一番沢山やったから!」と、不思議な理由で喧嘩になります。

普段から自分以外の子どもたちのことに非常に敏感で、少しでも他の子が優位だとか、優遇されているだとか感じる、自分がしてもらった記憶などまるで無いかのよう

になってしまふ。または、自分が優位になるために望ましくない方法をとる……。

そんなこんなもあります。が、発送作業が完了すれば、共通の目的を終えた達成感が子どもたちの間でも共有されているようで、ギザギザしていた雰囲気も少し緩やかになっていきます。

もしかしたら今読んでくださっているこの「光の子」も、子どもたちのそのようなやりとりを経てお手元にあるのかもしれない。

日誌抄

2020年11月〜12月

【12月末現在の在籍児童数】

幼児 5名 小学生13名
中学生9名 高校生7名
その他1名 計 35名
(二時保護を含む)

【11月】

2日 仙道家の男児3名と小西、道の駅みかもで車中泊。
7日 地域の方のご厚意で芋掘りへ。
9日 大地震の炊き出しを想定、園庭で非常食の豚汁を作

る。職員の日食に。
 11日 大阪王将の餃子等の寄贈式。例年はその場で焼きたてをいただいたが、今年にはコロナ禍のため。
 12日 高橋医院南條先生にお越しいただき、インフルエンザ予防接種。
 初代施設長の今関公雄氏来

訪。
 13日 大規模防水工事了了。公用車マーチ廃車。
 15日 高3の瑠璃、ブリッジフォースマイルの自立支援ワークショップへ。

16日 11月生まれの誕生会。
 20日 若月健悟牧師（守谷教会）による職員礼拝
 第1回フードパントリーを加須北子育て応援隊光の子会場として実施。
 27日 木田浩靖牧師（東埼玉バプテスト教会）による夕礼拝。評議員真田氏来訪。
 29日 アドベント（降誕節）礼拝始まる。センターホールに克蘭ツ、本園各家の玄関にリース、窓に切り絵を設置。

【12月】

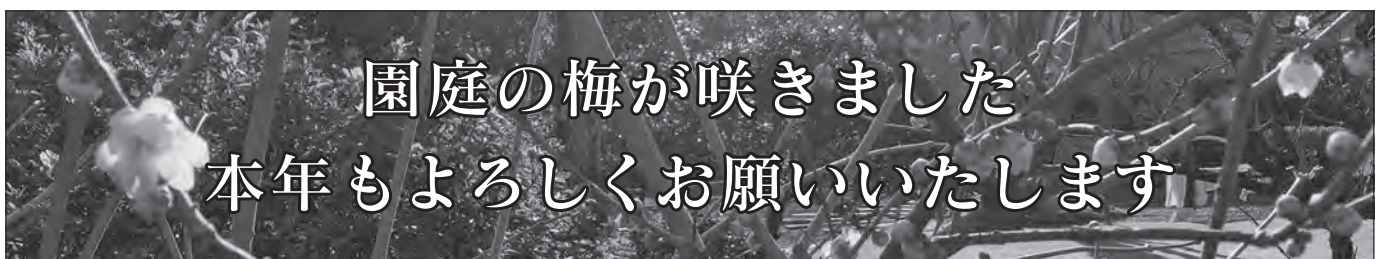
5日 幼稚園表現発表会。第2アドベント礼拝。

7日 職員研修（施設内虐待防止）
 13日 第3アドベント礼拝、12月生まれの誕生会。
 14日 職員研修。藤岡孝志氏（社会事業大学）による講義とグループワーク。
 防災訓練。台風接近による洪水警報発令、早期避難を想定。
 20日 第4アドベント礼拝
 25日 クリスマス祝会。ページェント上映をもって礼拝とする。深夜にサンタクロース来訪。

【寄贈者各位】

浅倉桂子 池端寛 岩井敦子
 大塚東一 大橋清栄 岡本有代 柿崎江美子 梶原完
 加藤瑠海 小池みどり 木暮伸二 櫻井秀夫 清水亨桐
 仙道喜美子 高尾知宏 戸田和歌 豊国道江 内藤芳江
 長田美紗子 奈良俊一 丹羽吉康 野間省伸 浜田文昭
 古川景子 八木橋敦子 山下勝雄 山田智 山田裕子 湯澤真彦 AMCプランニング
 (株)イトアンドホールディングス (株)石原商事大利根事業所 学校法人和泉短期大学

(株)市流 岩槻教会 浦和レツドダイヤモンズクラブハウ
 ス 大利根ふじこども園 大利根細間郵便局長金子智幸
 鴨川会 栗原造園 ゴルフド
 ウ物流センター 女子学院中
 学高校宗教委員会 聖学院キ
 リスト教センター (株)西武ラ
 イオンズ経営企画部 セカン
 ドハーベストジャパン 全国
 シャンメリー協同組合 全ヤ
 オコー労働組合 高橋会計事
 務所 (株)チュチュアンナ1%
 クラブ 東洋英和女学院保育
 こども科 ながはる株式会社
 (株)なとり 日本鏡餅組合
 ネットトヨタ東埼玉株式会社
 (株)ファースト・リテイリン
 グ フジッコ(株)関東工場 (株)
 ブレッシングス ほっともつ
 と鷲宮葛梅店 堀川愛生園
 公益財団法人毎日新聞東京社
 会事業団 前澤サンタ マル
 ハン古河店 ミズノテクニク
 (株)ゴルフ製造部 守谷教会
 (株)ヤクルト
 他多数の皆様 (敬称略)
【ボランティア各位】
 〈華道〉 岡本有代
 〈手芸〉 山田智 山田裕子
 〈学習〉 加藤瑠海 常松洋介
 他多数の皆様 (敬称略)



【発行】 社会福祉法人 光の子どもの家 【住所】 〒349-1155 埼玉県加須市砂原277-3
 【電話】 0480-72-3883 【FAX】 0480-72-6649 【メール】 hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp
 【Webサイト】 http://www.hikarinokodomonoie.com/ 【振替】 00130-1-128022
 【印刷】 (株)エル・アートデザイン